

礼拝 2020年6月7(日)

題 「風が吹くような響き」

テキスト：使徒言行録による福音書2：1～13

(聖書箇所は最後にあります。)

6月に入りわたしたちペンテコステ(聖霊降臨日)を迎えて歩み出しています。コロナウィルスもひと段落かと思いきや、北九州や東京では感染者が増えて来て、ちょっと気持ちが滅入る気もしますが、長い歩みをしていく心構えと工夫が必要な事を覚えさせられます。

さて、ペンテコステは、神の力である聖霊が降り、主イエスの教会が地上に誕生した、言ってみれば教会の誕生日です。またこの時期は、ユダヤでは昔から五旬節、五旬祭とも言われ、ユダヤではお祭りの季節・小麦の収穫の季節です。全世界に散らばっているユダヤ教徒たちがエルサレムに帰って来ていた時でもあります。またこの時期は、かつて砂漠をさすらっていたイスラエルの指導者モーセが神の山シナイ山で10の戒め、10戒を授かったことを記念する日として覚えられて来たようです。

さて、今日の聖書の箇所には、

「1:五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、

2:突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座つ

ていた家中に響いた。3:そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。4:すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語るままに、ほかの国々の言葉で話した。」とあります。

人々は集まって祈っていたのです。1章14節以下。「彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。」とあるとおりです。教会とは、「集まり」という意味です。教会とは、まず建物や制度があるのでではなく、イエスに心つながる者たちの集まりなのです。今は新型コロナウイルスのために、教会に集まりにくい状況ですが、「自主礼拝」や「ライブ配信礼拝」や場所は離れていても互いに祈り合うこと、メールや電話、手紙やはがき、週報などで心つながる方法はいろいろとあるのだと思われています。今でも互いに祈って、心を寄せ合い集める時、そこに神さまの力である聖霊が注がれるのです。教会が生まれていると受けとめてよいのです。

聖書には、「2:突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」とあります。さて、今日は、何か音の響きがあるでしょうか。実は音がしないという音もあるのです。昔、旧約聖書に出てくる預言者エリヤは、音のしない中に、静かにささやく神の声を聞いたのです。

神さまが語りかけられる方法は実に様々あるようです。

ここで「風」とは、聖霊を表しており、聖霊は本来「風」とか「息」という意味なのです。「激しい風が吹いて来るような音」とは、「風が命の息が吹きこまれる」という風に理解してもよいのだと思えます。神の助けを求めて祈る者たちに、神さまの命の息が吹き込まれていくのです。そして人は立ち上がって生きていけるのです。

主イエスが約束してくださった神からの聖霊が降った時、激しく吹き込まれて、群れが誕生するという、不思議な事が起こったのです。

また3節には「3:そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」とありますが、「炎」は、神が共におられることを表しています。

聖霊とは、一言で言えば「今、働いておられる神の善き力」です。この力は、私たち人間がコントロールすることはできません。天と地を造られた神から、十字架に命を捨てられたイエス・キリストをとおして与えられる力なのです。聖霊は目には見えません。風のような息のようで、自由に働かれ、命を注いでくださるのです。

聖霊を理解する時忘れてはいけないのは、聖霊を何か、魔術的な、不気味な力と受け取ってはいけない、ということです。聖霊は、イエス様と神さまについて教えてください。人を生かし、育て、教会を創り上げ、実を結んでくださるのです。ですから、キリスト者は、心から「神よ、聖霊を私たちの内に満たしてください。」という祈りを、祈り続ける事が大切なのです。神を信じ、祈る時、聖霊ご自身が私たちの内で働いて下さるのです。聖霊を受けた者たちは、たとえ弱くても神からこの世に派遣された者として生まれ変わるのです。日々変えられて行くのです。支えられ導かれて生きて行けるのです。そのことが、ペンテコステの出来事から私たちは学ぶことができるのです。

また、聖霊の働きの特徴は、<4:すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。>

とありますが、この11節<彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。>とありますが、この「ほかの国々の言葉」とは、当時、祭りでユダヤに戻って来ていた、ローマ帝国支配下の国々、聖書では東、西、北、南の順に地名が記されているようですが、その地方で語られていた言葉と言うふうにも理解できますし、ある聖書研究者たちは「異言」と説明しています。異言とは日常の言葉とは異なった違うことばのようです。聴く人は、通常理解できないのです。しかし、この日、そこにいた人々は、語る人たちが「神の偉大な業」を語っているということは理解できたのです。これは不思議であ

り、奇跡のような出来事です。不思議なことが起こったのです。「神の偉大な業」とは、十字架のイエスと復活されたイエスの出来事のことです。イエスの十字架と復活は、人間の心をさまざまな縛りから解放し自由にする出来事、救いの出来事なのです。

イエスの弟子たちは、この時から主イエスを力強く内外に伝えて行ったのです。イエス・キリストの十字架と復活の出来事によって、神は決定的にご自分の存在と声を聞かせてくださったのです。そのことを信じるのがキリスト者であり、教会なのです。この日から、イエスを主と信じる人々は、神さまから勇気を頂いて語り出したのです。

ある書物によると、約2000年前の初代教会の働きが当時のローマ帝国内へ広がった理由としては、キリスト者の集いが人々をひきつけたこと、人々がそれまで縛りつけていた考えから自由にされて行ったこと、キリスト者たちが社会的な関係を作っていたこと、そして支える働きをして行ったことがあげられています。また男性中心の時代の中で、女性の存在が大きかったとも言われています。

教会の良き働き、キリスト者の良き働き神の働きを、進める力が聖霊の働きです。回りの人たちに理解してもらえる可能性はいつもあるということです。しかし、時には困難を経験することがありますし、良いことをしたと思っても、人に理解されないどころか、誤解されたり、悪く言われることもあります。恐れと不安の中に心が暗くなることもあるのです。それも驚かなくてよいということです。悪は人の心を引き離して行きますが、愛は人と人をつないで行きます。

今日、コロナウィルスの中、人間の生き方を目に見える教会のあり方わたしたちは見据えながらも、教会は、あくまで<神の力><イエス・キリスト>を拠り所として、聖霊に導かれながら祈りつつ歩み続ける群れでありたいと願います。私たちも、イエスさまによって、神さまから愛の力を頂いているのですから、傲慢になることなく謙虚に、人と人が心通う世界を作るために共にあゆんで行きたいと願います。

1:五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、

2:突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。

3:そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。

4:すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの

国々の言葉で話しました。

- 5:さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、
- 6:この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。
- 7:人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガラヤの人ではないか。
- 8:どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。
- 9:わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、
- 10:フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、
- 11:ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。」
- 12:人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。
- 13:しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言って、あざける者もいた。